

活 動 報 告

共同研究グループ活動報告（2020 年度）	170
講演会要旨	177
購入文献解題	178
所員自著紹介	182

共同研究グループ活動報告（2020 年度）

日中関係史

2020 年 1 月からのコロナ禍の影響で正常な研究会活動を展開することができなかったが、5 月からは zoom 会議を導入し、合計 7 回の例会を開催することができた。例会の記録はすべて <http://chineseovers.jugem.jp/> に掲載している。以下、本年度に開催した研究会活動を箇条書きで記す。

(1) 2020 年 5 月，第 72 回例会

◎日時：2020 年 5 月 23 日（土曜）

◎場所：zoom 会議

◎内容：

1 書評：周一川『近代中国人日本留学の社会史』を読む——孫安石（神奈川大学），見城悌治（千葉大学）

2 研究会の運営報告，拡大会議 zoom 開催

(2) 2020 年 7 月，第 73 回例会

◎日時：2020 年 7 月 4 日（土曜）

◎場所：zoom 会議

◎内容：

1 「実藤恵秀の中国研究を再考する——日中戦争前後を中心に」ウィクトリア（東京大学大学院，修士課程）

2 「湖北省留日学生の留学経験とその影響」王鼎（新潟大学大学院，博士課程）

(3) 2020 年 7 月，第 74 回例会

◎日時：2020 年 7 月 25 日（土曜）

◎場所：zoom 会議

◎内容：司会——王雪萍（東洋大学）

1 「中華人民共和国建国後の留学生選抜」李昱（九州工業大学教養教育院准教授）

2 「中国留学研究に関する一考察」張泓明（山西大学歴史文化学院講師）

(4) 2020 年 8 月，第 75 回例会

◎日時：2020 年 8 月 22 日（土曜）

◎場所：zoom 会議

◎内容：

1 「1930～40 年代における喇嘛僧の日本留学と日本仏教界」池田健雄（千葉大学，特別研究員）

2 「清末の旗人留日学生について——『大同報』を中心に」阿部由美子（二松学舎大学，非常勤講師）

(5) 2020 年 9 月，第 76 回例会

◎日時：2020 年 9 月 26 日（土曜）

◎場所：zoom 会議

◎内容：

1 「近代中国におけるサイエンスとデモクラシーとミリタリズム」小野寺史郎（埼玉大学）

2 『『軍国民』と近代中国のナショナリズム』李曉東（島根県立大学）

(6) 2020年10月，第77回例会

◎日時：2020年10月24日（土曜）

◎場所：zoom 会議

◎内容：著者に聞く——汪婉（北京大学）『清末中国対日教育視察の研究』（汲古書院，1998年）

(7) 2020年11月，第78回例会

◎日時：2020年11月21日（土曜）

◎場所：zoom 会議

◎内容：著者に聞く——熊本史雄（駒沢大学）『近代日本の外交史料を読む』（ミネルバ書房，2020年）
（文責 孫安石）

色彩と文化Ⅳ

本研究は，2020～2022年度の学内共同研究奨励助成金を獲得し，「多文化共生社会の言語景観——観光立国日本の多言語表示と情報発信を再考する——」という研究課題をうちたて（代表者：鈴木幸子，メンバー9人），「言語景観」に観察と考察の軸足を置きながら，「観光」と「外国語教育」に応用可能な知見を得るべく研究活動をおこなっている。2020年度は二度にわたる緊急事態宣言の影響を受け，本研究に不可欠な実地調査がほとんどできなかったため，研究計画の大幅な変更を余儀なくされた。そこで，メンバーの間で定期的にオンライン研究会を開催し，情報共有や学術交流を図りつつ，今後予定される現地調査にそなえることにした。

1 研究会の開催

(1) 第1回研究会

開催日：7月31日（金）20：00～23：00

会 場：Zoom

発表者：尹亨仁（本学国際日本学部教員）

テーマ：言語景観研究の現状と研究会の方向性についての意見交換

(2) 第2回研究会

開催日：8月31日（月）20：00～23：00

会 場：Zoom

発表者：尹亨仁（本学国際日本学部教員）

テーマ：言語景観と授業での活用——現状と課題——

(3) 第3回研究会

開催日：9月30日（月）20：00～23：00

会 場：Zoom

発表者：鈴木幸子（本学国際日本学部教員）

テーマ：「観光地における言語対応——まちなかの取り組み——（『観光言語を考える』第2章）」を中心とした分析と考察

(4) 第4回研究会

開催日：10月30日（金）20：00～23：00

会 場：Zoom

発表者1：鈴木慶夏（本学外国語学部教員）

テーマ1：北海道の言語景観から問題提起——表記方法の側面から——

発表者 2：佐藤裕美（本学外国語学部教員）

テーマ 2：外国人旅行者が必要とする言語情報——鎌倉の場合——

(5) 第 5 回研究会

開催日：11 月 30 日（月）20：00～22：30

会 場：Zoom

テーマ：鎌倉・藤沢の観光と外国語

発表者（ゲスト発表）：由川美音（本学外国語学部教員）

(6) 第 6 回研究会

開催日：12 月 28 日（月）20：00～22：30

会 場：Zoom

発表者 1：鈴木幸子（本学国際日本学部教員）

テーマ 1：異文化コミュニケーション学会の参加報告

発表者 2：高木南欧子（本学国際日本学部教員）・佐藤梓（本学経営学部教員）

テーマ 2：キャンパスにおける留学生の言語景観

発表者 3：尹亭仁（本学国際日本学部教員）

テーマ 3：「観光とことば」に関する論文の紹介

(7) 第 7 回研究会

開催日：1 月 29 日（金）17：00～19：30

会 場：Zoom

テーマ：言語景観・観光関連の参考文献の紹介とデータベース化に向けての意見交換

(8) 第 8 回研究会

開催日：2021 年 2 月 26 日（金）17：00～20：00

会 場：Zoom

発表者：李忠均（本学国際日本学部教員）

テーマ：未定

(9) 第 9 回研究会（予定）

開催日：2021 年 3 月 29（月）17：00～20：00

会 場：Zoom

発表者：小林潔（本学国際日本学部教員）

テーマ：未定

2 海外調査

なし

3 国内調査

(1) 尹亭仁：2020 年 9 月 17 日～9 月 19 日

[福岡・熊本の言語景観の調査]

(2) 尹亭仁：2020 年 11 月 5 日～7 日

[富山の言語景観の調査]

(3) 李忠均：2021 年 3 月 3 日～6 日（予定）

[京都・奈良の言語景観の調査]

4 講演会の開催

開催日：11 月 3 日（祝・火）17：10～18：50

会 場：Zoom

演 題：「モルディブの観光と言語景観」

講演者：河野夏美（本学卒業生，元 JAL スカイグラウンド・スタッフ，Maldives Travel Factory
ツアー・オペレーター）

5 参考文献のリストアップと整序

学内共同研究助成による活動の一環として，言語景観・観光関連資料のデータベース化のため，諸資料のリストアップと整序にも注力している。

（文責 鈴木慶夏）

言語変異研究

1. 研究内容：今年度は主に歴史社会言語学の視点から中国語標準化の実態と政策に関する資料調査と分析を行った。論文の執筆は，歴史的言語景観に関するものと言語景観に関するものを中心に行った。
2. 今年度の主な研究成果：
「近代上海言語景観の生態言語学的類型」の論文執筆完成（『人文研究』（203号）2021年9月刊行予定）
3. 今年度主な研究所蔵資料の収集：
『宋画全集・第8巻』浙江大学 2014年
『清画全集・第8巻』浙江大学 2019年
『旬刊美術新報・第1～6巻』飯野正仁・東京文化財研究所 2017年
『中華大蔵経』（続編7～18）中華書局 2019
4. 2021年度は主に引き続き歴史社会語用論と歴史言語景観について研究調査を実施する予定である。

（文責 彭国躍）

〈身体〉とジェンダー

1. 講演会・研究会の開催
 - 第1回研究会
開催日：2020年9月24日（木）
会場：オンライン
新メンバーに自身の研究を簡単に紹介してもらいながら，昨年度出版した『男性性を可視化する——〈男らしさ〉の表象分析』に続く叢書のテーマを検討し，それに沿った研究発表計画をたてた。
 - 第2回研究会
開催日：2021年1月22日（金）
会場：オンライン
発表者（所属）：
鈴木宏枝（外国語学部・英語英文学科）
「『ハリー・ポッター』シリーズにおける母性——メローピー・ゴントとリリー・ポッター」
秋山珠子（外国語学部・中国語学科）
「童話 vs ウィルス——章夢奇（ジャン・モンチー）：河北省“47 km 村”の定点観測」
2. シンポジウムの開催 なし
3. 活動内容

〈身体〉とジェンダー研究会は『男性性を可視化する——〈男らしさ〉の表象分析』を2019年度に出版したが、その後に続く企画として、男性表象をテーマにした叢書の出版を目指して研究会を組織している。今年度については第1回研究会では、学内・学外から多くの新メンバーを集め、「種」や「動物」、「Covid-19」などといった新しいテーマを模索しながら、研究発表を重ねていくことを決定した。第2回研究会では、新メンバーである鈴木宏枝先生に、世界中で読まれる現代児童文学『ハリー・ポッター』における母性というテーマで、主題にあげられることが少ない二人の登場人物に注目するという発表を行ってもらった。また秋山珠子先生には、中国のインデペンデント映像作品を紹介してもらい、2020年に世界を席卷した新型コロナウイルスと寓話の関係、子どもの想像、ファンタジーといったテーマを考察してもらった。多数の研究者が参加し、研究会は大いに盛り上がった。また、今後ジェンダー表象を分析する上でのヒントを多数得ることができた。

(文責 熊谷謙介)

自然観の東西比較

本年度は新型コロナウイルス感染症流行のため、研究会を開くことができず、共同研究としては休止状態であった。

ヒト身体の文化的起源

活動報告：新型コロナウイルス感染症の影響により、研究テーマに関連した講演会と調査を実施することができなかった。

NCH 新聞研究会

本研究会は、神奈川大学図書館が所蔵するNCH (North China Herald) 新聞 (ONLINE 版) の日本、中国、韓国、東南アジア諸国に関連する新聞記事の研究を目指している。2020年はコロナ禍の影響で研究会を開催することはできなかったが、同資料の利用と紹介を兼ねて、孫安石「근현대 상해 도시계획 변천의 역사—최신연구성과와 자료를 중심으로」(韓国, 『比較中国研究』, 2020年1月, 仁川大学中国学術院), 孫安石「상해 연구의 못다한 이야기들—「極東올림픽 대회」와「상해 국제경보 대회」」(韓国, 釜慶大学, 인문한국 플러스사업단, NewLetters 『등대지기』 10号) の2本の論考を発表することができた。2021年度からは、しばらくの間活動を休止する。

(文責 孫安石)

日中韓対照言語研究

「日韓対照言語研究」は「日韓両言語におけるヴォイス・テンス・アスペクト・モダリティの対照研究」を課題として掲げ、研究活動をすすめてきた。2020年度からはすそ野を広げて中国語を加えた形で、「日中韓対照言語研究」を本格的に稼働することにした。

研究会の開催

(1) 日時：2021年2月25日(木) 15:00~17:00(予定)

場所：Zoom

発表者：鈴木慶夏(本学中国語学科教員)

テーマ：並列型名詞句の多様性についての日中対照

(2) 日時：2021年3月25日(木) 15:00~17:00(予定)

場所：Zoom

発表者：尹亭仁(本学国際文化交流学科教員)

テーマ：韓国語の漢語動詞をどう教えるかー日本語から手がかりを求めて

年2回以上の研究会の開催を計画している。来年度は対面での発表が厳しい場合は遠隔での実施も視野に入れ、活性化を試みている。対照言語研究の観点から日中韓のみならず英語のテンス・アスペクトの研究者にも参加を呼びかける予定である。また海外の研究者にも参加と発表の機会を提案したい。

(文責 尹亭仁)

各国近代文学の研究

1. 講演会・研究会の開催

第1回研究会

開催日：2020年7月18日

会場：ZOOM開催

全メンバーによる意見交換会

第2回研究会(研究報告)

開催日：2021年1月31日

会場：ZOOM開催

講演者：マヌエル・アスアヘ・アラモ氏(神奈川大学非常勤講師)

演題：20世紀後半のラテンアメリカ文学者による、日本古典文学の翻訳とその時代背景

2. 活動内容

本研究グループは、活動4年目である。研究対象の時期的な重なりを基軸に据えながらも、研究をめぐする方法や環境・場の異なりについて相互に意識し、意見交換をしながら、領域横断的な近代文学研究の方向性を模索していく。今年度は、新メンバーを迎えての意見交換会を行い、研究報告会も予定している。さまざまな専門領域、方法論を携えたメンバーによって、それぞれの立場から質疑・意見交換を行い、お互いの知見を深めた。(第2回研究会については、次年度報告予定)

(文責 松本和也)

知覚認知システムの普遍性と多様性

講演会・研究会の開催：なし

シンポジウムの開催：なし

活動内容：

本研究グループは、人の知覚・認知の仕組みについて、研究することを目標としており、特に、知覚の様相や認知的様相に共通な普遍性とそれらの様相の相互効果によって展開した多様性を現象・行動観察や計算論的解析などを通して明らかにする活動を行うために共同で取り組んでいる。

本年度は、新型コロナウイルス感染防止の観点から、活動ができなかった。昨年度開催したシンポジウムも企画していたが、講演者を呼ぶことができず、中止した。

(文責 吉澤達也)

学びの見える化研究会

1. 研究会の開催（オンライン実施）

○研究会メンバー：

齊藤ゆか（神奈川大学教授）

森和夫（株式会社 技術・技能教育研究所）

西村美東士（若者文化研究所，聖徳大学非常勤講師）

ほか数名の参加

○開催日：

月2回，土曜日9時～14時ごろ 全19回

（2020年5月9，16日，6月13，20日，7月11，25日，8月1日，9月5，19日，10月3，17日，11月7，21日，12月5，19日，2021年1月9日，23日，2月6日，20日以上（予定含む））

2. 活動内容（テーマ・研究成果）

齊藤ゆか（2020）「市民性と地域参画力を育てるサービス・ラーニングの可能性と評価——『市民大学』における実践から——」『日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要』35(2)39-50

齊藤ゆか（2020）「地域人材を生かすソーシャルビジネス——人材育成・活用と組織活性化の視点——」『都市とガバナンス』Vol.34 27-35 2020年10月

森和夫（2020）『実践現場の能力管理——生産性を向上する人材育成マネジメント——』日科技連出版社

西村美東士（2020）『わが国の青少年教育及び青少年問題：文献資料集』

大妻女子大学人間生活文化研究所 eBOOK

（文責 齊藤ゆか）

芸術（アート）と物語の交雑／発信力

活動内容

本研究グループは，2020年秋に結成したもので，本格的な活動は次年度以降からとなる見通しである。今年度中の活動としては，1度，メンバー間の興味関心を共有するための研究会を催す予定である。

活動内容としては，広義の芸術（アート）について，物語との交雑を視野に入れて，調査・研究を行っていく予定である。ここで対象となるのは，近世の浮世絵をはじめとした図像，近代における西洋美術移入，現代におけるポップ・ミュージック，舞台芸術を中心としたパフォーマンス，現代美術等々，文字通り「広義」の「芸術（アート）」であり，本グループでは，その境域を問いながら，それらがさまざまな物語とどのように交雑し，そこからどのような意味（作用）が生じ，発信力となっていくのかについて，研究を深めて行きたい。

（文責 松本和也）

講演会要旨

演 題：モルディブの観光と言語景観

講演者：河野夏美氏

(元 JAL スカイグラウンドスタッフ, Maldives Travel Factory ツアーオペレータ)

開催日：2020 年 11 月 3 日 (火)

会 場：Zoom

この講演会は、共同研究グループの「色彩と文化Ⅳ：言語景観と外国語教育」の研究活動の一環として開催したものである。研究会を公開したところ、研究会のメンバー以外に 20 人以上の学生が参加し、斬新な質問も多く、コロナ禍の中、非常に有意義な講演会となった。

内容としては、次の 3 点にまとめられる。

- ①モルディブの言語景観は主にディベヒ語（写真 1・写真 2 の○印のところ）と英語のわりとシンプルな形。外国人労働者が相当いるが言語景観に関してはまだまだ現地語のディベヒ語＋英語がメジャー。
- ②コロナ禍で観光大国のモルディブは大打撃を受けた。しかし 7 月 15 日から再オープンし、ヨーロッパやアラブのお客さんを中心に少しずつ観光客が増加傾向にある。
- ③海外で働くことは大変なこともあるけど楽しいことである。

海外とはいえ、仕事は対日本人のお客さん、それゆえに大変なこともあるが「ありがとう」「楽しかった」「また絶対来ます！」等のお客さんの言葉が励みになる。



写真 1 ディベヒ語 1

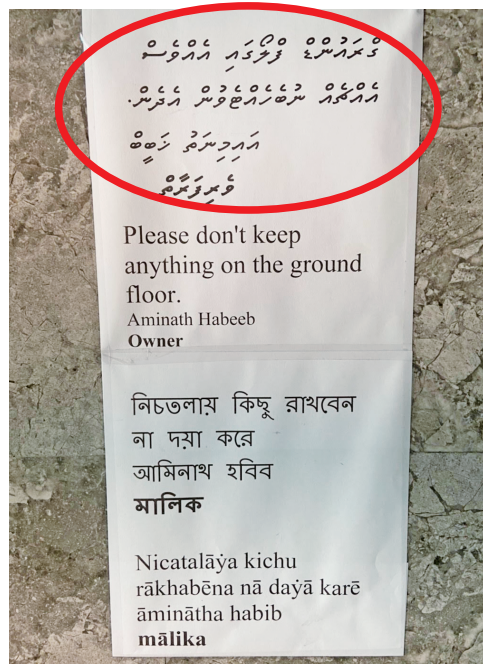


写真 2 ディベヒ語 2

(文責 尹亭仁)

購入文献解題

『井上毅文書』（[マイクロ資料]） 28 巻—94 巻

編 著 者：国学院大学図書館

出 版 社：雄松堂フィルム出版

出版年月：1970 年

内容紹介

『井上毅文書』は、井上毅（1844～1895）が残した梧陰文庫（現在は国学院大学所蔵）のマイクロフィルム版。今回の購入は 28 巻から 94 巻。マイクロフィルム版は「秘庫之部」「袋入之部」「冊子之部」「梧陰先生自筆草稿類」の構成で全 94 巻だが、神奈川大学では 28 巻以降の巻が欠けていた。今回の購入はその不足分巻を補うもの。

井上毅は明治政府の中枢で政策立案などに携わり、明治憲法の制定、議会制の定着など近代日本の根幹となる諸制度の構築を担った明治期を代表する法制官僚である。近代日本の国家構造の骨格をつくったキーパーソンとも称される。その井上が執務参考資料として、自身で収集整理保存したものが梧陰文庫である。梧陰文庫には台湾出兵、琉球問題など周辺諸国と関係をめぐる資料、憲法と皇室制度、議会制度と官制、地方自治制度と教育制度など、近代日本の外交を含めて諸制度構築のための基本的な資料が収められている。

井上は政策立案にあたって資料を網羅的に収集分析しており、資料が網羅的で体系的なだけでなく、現在では他で失われた貴重なものも残されている。この資料は井上自身の仕事だけでなく、近代日本の諸制度を理解するために重要な情報を提供する。近代日本の国家像や諸制度、周辺諸国との関係などを知る上で欠かせない基本的な資料である。

（文責 後田多敦）

新天理図書館善本叢書第4期 『奈良絵本集 全八巻』

編著者：天理大学附属天理図書館【編】

出版社：八木書店

出版年月：2020年2月完結

内容紹介

奈良絵本とは、室町時代後期から江戸時代中期にかけて作られた彩色絵入りの絵本や絵巻のことをいう。詞は、主に室町時代に作られた御伽草子を題材にしたものが多い。印刷されたものではなくすべて手作業で作成されており、子供の読み物とされたであろう素朴なものから、嫁入り本と思われる豪華本に至るまで様々なレベルの作品があった。江戸時代前期の豪華本は、絵師（興福寺の絵仏師という説あり）や書家の分業によって作成され、絵は金銀、朱などの極彩色で精密に描かれ、かなり高価であったことが窺われる。

今回購入したのは、八木書店が新天理図書館善本叢書の第四期として刊行した「奈良絵本集 全八巻」セットである。天理図書館に収蔵されている、世界最高峰に位置するとされる数多くの奈良絵本から、24点を精選して収録されたもので、高精細カラー版の印刷で、微細な色遣いが表現されている。その多くが、本シリーズで初めて紹介される作品である。

日本美術史、物語研究のみならず、日本の宗教・自然観・動物観や倫理等、様々な研究に資する貴重な資料である。以下に、各巻の内容を列記しておく（同名の別本を除く）。

奈良絵本集一（北野天神縁起絵巻、八幡大菩薩御縁起、鼠の草子絵巻、やひやうゑねずみ）、

奈良絵本集二（舟のゑとく、常盤の姫、小男の草子絵巻、小おとこ）、

奈良絵本集三（小伏見物語、ひだか川）、

奈良絵本集四（あま物語、大古久まい、磯崎物語）、

奈良絵本集五（いはやものがたり、じやうるり）、

奈良絵本集六（しづか、まんぢうのさうし、花鳥風月物語）、

奈良絵本集七（熊野の本地、宝月童子）、

奈良絵本集八（虫妹背物語、山海異形）

（文責 上原雅文）

『中国近代教育文献叢刊・留学教育卷』の解題（1）

編著者：田正平

出版社：浙江教育出版社

出版年月：2020年3月

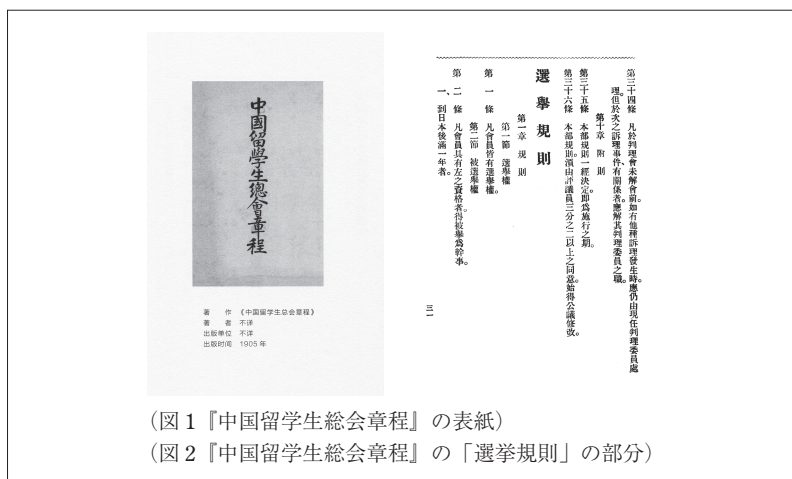
神奈川大学・人文学研究所の日中関係史共同研究グループが進めている「中国人留学生史研究会」は1990年代の後半から活動を展開し、その共同研究の成果として、以下の4編の論文集を刊行した（これまでの活動の詳細については中国人留学生史研究会 HP <http://chineseovers.jugem.jp/> を参照）。

- (1) 大里浩秋・孫安石編『中国人日本留学生史研究の現段階』（御茶の水書房、2002年）
- (2) 大里浩秋・孫安石編『留学生派遣から見た近代日中関係史』（御茶の水書房、2009年）
- (3) 大里浩秋・孫安石編『近現代中国人日本留学生の諸相』（御茶の水書房、2014年）
- (4) 孫安石・大里浩秋編『中国人留学生と「国家」「愛国」「近代』』（東方書店、2019年）

これらの論文集の刊行後、2020年には中国語版の論文集の刊行準備や東京大学駒場キャンパスにおける一高関連のシンポを開催する計画があり、東京大学、京都大学、東北大学の公文書のなかに含まれている中国人留学生史関連の資料調査の継続なども予定されていたが、コロナ禍の影響ですべての活動を中止し、Onlineによる例会を開催することになった。

ところが、その後、2020年3月に浙江大学教育学部の田正平教授を執行主編とする『中国近代教育文献叢刊・留学教育卷』（全24冊、浙江教育出版社）が出版されたという便りが届いた。田正平教授による総序によれば、『中国近代教育文献叢刊』は、今後、教育関連の中国近代文献を「教育学」、「教育心理学」、「教育史」、「比較教育」、「德育」、「教育法規」、「教育行政」、「教育統計」、「教育時論」、「教育会議」、「教育社団」、「教材教法」、「外国教育紹介」、「各類教育」、「留学教育」、「地方教育文献」、「学校文献」、「教育叢書」の18巻（約500冊）に分けて収録し、順次影印出版する予定であるというから刊行が完了すれば中国の教育関連の研究において参考すべき重要な参考資料になることに間違いなからう。

今回刊行された『中国近代教育文献叢刊・留学教育卷』は、中国近現代の留学と教育、教育考察に関わる文献70種類を総合類、留学日本、留学美国、留学欧州の4種類に分け、全24冊にまとめたもので中には筆者自身も未見の資料が多数含まれている。そこで、この場を借りて、各分冊の内容を紹介して行くことにしたい。



第1冊は、『中国留学生總會章程』、寰球中国学生会編著『留学指南』、海外留学咨询委員会編『留学

指南』の3つの資料を紹介しているが、各資料の出所が明記されておらず、資料が時系列に配置されているわけではないので、研究を始めた初心者にはその利用に若干、難儀するかもしれない。

◎『中国留学生総会章程』（1905年）によれば、中国留学生総会は、日本に留学した中国人留学生全員を会員とし、「評議部」、「執行部」、「判理部」の事務分担によって組織され、「各省同郷会」を分会組織として配置していた。総会の本部評議員は評議員長1名、副評議員1名、書記2名、評議委員10名によって構成され、執行部は幹事長1名、副幹事長1名、庶務科幹事3名、書記科幹事4名、収支科幹事2名、学務科幹事3名、調査科幹事3名、招待科幹事3名の合計20名によって組織された。

「判理部」という組織は、評議部と執行部の部員によって臨時に組織される部署で、留学生総会が定めた「自治公約」の規定に違反した事件や留学生からの各種の訴えがあった時に臨時で組織され、審議と是非の判断を下す役割を担っていた。「判理部」の規定によれば、その業務は、会員による規約の違反や評議部、執行部の不正についての訴えは勿論、留学生個人の行為が中国人留学生全体の名誉を傷つけた時、治安を妨害したとき、他の人の名誉を毀損した時の判断を下すことを記載しており、その審議する内容が多岐にわたっていたことがわかる。

ここで注目すべきことは、評議員、執行員などの選抜がすべて会員による選挙によって行われたということである。1902年に中国人日本留学生によって組織された「清国留学生会館」の章程においても「選挙」と「投票」という手続きが極めて重要視されたことについては、拙稿「清国留学生会館研究初探」（『中国人留学生と「国家」「愛国」「近代』、前掲書、所収）でも紹介し、その画期的な意義を高く評価すべきであると指摘したが、この選挙重視の考え方は、1905年の『中国留学生総会章程』にも継承されている。

ここで章程の「第四章 選挙」の部分をより詳しく見てみれば、会員は誰もが評議員と幹事を選ぶ選挙権があり、評議員は来日してから半年を、幹事は来日してから一年が経過した時点で被薦挙権があったことがわかる。選挙に用いる投票用紙が指定されることは勿論、選挙に参加する人は一人一票を保持し、幹事を選ぶ時には出身省の一人名とその他の省の一人名の合計二名を記入し、評議員を選ぶときには出身省の一名を明記する、としている。また、投票用紙に選挙に関係ない事項が記入されていたり、二名以上の記入があった時、筆跡が曖昧で名前を特定できないとき、被選挙権の無い人が記名された時などには投票を無効にすることも明記している。これらの規定から中国留学生総会が、選挙の公正な実施を保証するための選挙規則を重要視していたことをうかがうことができる。

（続く）

（文責 孫安石）

所 員 自 著 紹 介

1. 熊谷謙介（編）『男性性を可視化する ― 〈男らしさ〉の表象分析』

青弓社, 2020 年 2 月, 286 頁。

共同研究グループ「ジェンダーと〈身体〉」のメンバーを中心として執筆し、人文学研究叢書の第 44 巻として出版された論集である。20 世紀の文学・芸術において表現された多様な男性像を読み解き、常にマジョリティであったがゆえに見過ごされがちだった「男らしさ」をあぶりだす試みである。ドイツ表現主義から現代アートまで、渡米した中国演劇人の経験から男性ダンサーによる『白鳥の湖』まで、男性性は時代・地域によってさまざまな変化を見せ、媒体となるメディアによって変容していく。また 20 世紀において男性性が強く打ち出されたのはアメリカであり、ときに戦争や人種差別と絡まり合いながら歴史を動かしてきたと言える。

一方で、「男らしさ」という問題設定は「男とは……である」という本質主義的な定義を招く場合もあり、危機に陥っているとされる男性性の復権という動きも招きやすい。本書では、多様な性表象という視点をとり、男性の周囲にいる母や子ども、同性グループといった変数を導入することで、男性性を唯一の本質に還元することを避けることを目指した。ホモソーシャルやプロマンス、ヘゲモニックな男性性といった、注目されつつある概念と連関させながら、今後さらにフィールドを広げた男性表象論が展開されることを願っている。

2. 松本和也『太平洋戦争開戦後の文学場 思想戦／社会性／大東亜共栄圏』

神奈川大学出版会, 2020 年 5 月 30 日, 355 頁。

本書は、これまでの文学史（研究）において、種々の理由・事情から迂回されてきた太平洋戦争開戦後の文学場を検討対象として、言説分析を通じて考察した研究書である。また、論者にとっては、昭和 10 年代の文学場を研究対象とした拙著『昭和一〇年代の文学場を考える 新人・太宰治・戦争文学』（立教大学出版会, 2015）、『日中戦争開戦後の文学場 報告／芸術／戦場』（神奈川大学出版会, 2018）と通底する問題関心による、研究成果の第 3 でもある。

太平洋戦争期、思想戦の戦士としての活躍が期待された文学者たちは、大東亜共栄圏を謳って展開される戦局の中、国家・国民のためにどれだけ役に立てるのかという社会性に、それぞれのスタンスで向きあっていった。本書では、これまででいねいに検証されることのなかった太平洋戦争開戦後の文学について、同時代資料の広範な調査・分析に即して、言表された限りにおける文学者の言動や作品、評価軸の変動について考察した。

3. 島川崇（単著）『新しい時代の観光学概論 持続可能な観光振興を目指して』

ミネルヴァ書房, 2020 年 11 月, 248 頁。

「観光学は学際的な学問である」

この言葉を何度聞いたことか。社会学、文化人類学、都市計画、経営学、経済学、語学……あらゆる

分野から研究者が観光学に集っている現状を表した言葉である。しかし、その出自が確立された学問分野であればあるほど、自分の研究分野（ディシプリン）が「観光学」であると語ることを躊躇する研究者をよく見てきた。今は観光が注目を浴びているから、観光に集ってきているけれど、これがもし世間の観光への注目がなくなったら、または、最悪、世間が観光を目の敵にしたりするような事態になったら、そのような人たちは、自分の観光への関与の痕跡を我先に消すだろう。観光学を学んで観光学の研究者や大学教員になった人はまだ数えるほどしかいないから、それはある意味やむを得ないのかも知れないが、そこに、観光学というこの新しい学問を確立させようという気概は感じられない。今、観光学には一貫したメッセージが必要である。それがないから、外部環境の急激な変化にただおろおろするばかりなのだ。今観光学が考えていかなければならないことは、何よりも観光の持続可能性だ。そして、観光を持続可能にするためには、商業的に成立すること、全てのステイクホルダーが倫理観を持つこと、歴史や背景、ストーリーを大切にすること、それを語る語り部の存在をもっと大切にすること、人間の存在と積み重ねてきた業績をリスペクトすること、これを最初から最後まで貫き通した今までにないテキストとなったと自負している。

4. 島川崇編著、神田達哉、青木昌城、永井恵一著『ケースで読み解くデジタル変革時代のツーリズム』ミネルヴァ書房、2020年11月、293頁。

2010年代後半から「近い将来AIによって人の仕事が奪われていく」といった論調が喧しくなった。一方、観光の分野では空前のインバウンドブームが席卷しており、人手不足が大いに課題となっていた。経営者を中心に、AIに対する期待は否が応でも高まっていた。世間がAIに対して期待と恐怖とを併せ持った複雑な感情でアプローチする中、本書の執筆メンバーは、当初から、あまりにもAIに対して過度な期待や過度な恐怖は本質を見誤ってしまうのではないかとの問題意識を持っていた。島川は、労働者にとって害悪となるものは、AIではなく、そのAIの本質を見誤り、やたらと恐怖を煽り、思考停止したおかげで正常な判断ができなくなってしまった経営者層やマネジメント層にはかならないと指摘した。それを踏まえ、AIをコントロールしていくには今後どのようなマインドが必要になっていくのか、そして、顧客とのコミュニケーションはどのように変化していかなければならないのかを4名の執筆者がそれぞれの専門分野から考察した。これからの新しい時代を作っていく組織と人材に関して、デジタルに振り回されることなく、デジタルをツールとして使いこなせるようになるためのマインドセットを本書は構想段階から一貫して検討してきたが、図らずもコロナのおかげでそれが具現化できる可能性が高まっていると実感している。来るべき未来が、さらに人を大切にする世界になるように願いながら執筆した著作である。

5. 松本桂樹・榎本正己『上司と部下のメンタルヘルス・マネジメント対策』税務研究会出版局、2020年12月、200頁。

本書は、大阪商工会議所が実施するメンタルヘルス・マネジメント検定試験の1種マスターコース（人事労務担当者・産業保健スタッフ向けコース）の合格者に向けて定期的に発信しているメールマガジンの内容をベースにして、昨今のトレンドを踏まえ職場におけるメンタルヘルス対策を論じた内容となっている。

昨今、勤労者の精神疾患の発症背景にパワハラ問題が取沙汰されており、2020年6月に労働施策経

合推進法（いわゆるパワハラ防止対策法）が施行となって、企業にパワハラの防止対策が求められるようになってきている。加えて、コロナ禍により勤労者の働き方が大きく変化し、特にテレワークの導入によってこれまでになかったトラブルへの対処法が求められるようになってきている。

本書は全体で4章構成となっており、1章「今、働く現場で何が起きているのか？」では、コロナ禍によって生じている職場動向を概観し、2章では「パワハラの定義と法改正」として、厚生労働省が示すパワハラの定義、そして分類等を解説している。3章では「事例で分かる 問題とその対処法～上司と部下のラインケア編～」として、メンタルヘルス対策の中核となるラインケアの実際を解説し、4章では「事例で分かる問題とその対処法～ウイズコロナ編～」として、コロナ禍において必要な具体的対策の事例を紹介している。

(松本桂樹)

6. 中村隆文『世界がわかる比較思想史入門』

ちくま新書、2021年1月、256頁。

本書は、古今東西の宗教や哲学といった「思想」の概要を説明するとともに、それぞれの思想のもとで生きる人々の価値観・人生観・世界観の構造を示し、それぞれの思想間での比較をしつつ、その共通点や差異を論じたものである。

最初に、西洋の価値観の土台にある「ギリシア思想」とその影響を受けた「ローマ文化」、そして、中東からヨーロッパ、そして世界各地へと影響力を及ぼした「ユダヤ教」「キリスト教」「イスラーム」について解説する。その後、インド思想や中国思想を論じるなか、個として真理に沿って生きること、そして社会集団として「理」に沿って生きることとはどういうことかを論じる。中盤では、東洋思想の一つでありながら、日本という土地柄や歴史的事情のもとで生まれた日本思想——その事例として、武士だけでなく町民（商人）の道をも示す新たな儒学を提唱した石田梅岩や、江戸時代以降に日本独自の「もののあはれ」を発見した国学の世界観など——を解説する。

後半から最終章にかけては、近代哲学から現代哲学の流れを紹介しつつ、「自分の人生を生きる」とはどういうことかを、ハイデガーやデリダなどを引き合いに出しながら、そこにおいて仏教的な「空」や一意専心の考え方などの共通点を論じてゆく。

異なる思想や価値観の人々同士が完全に見解を一致させたり、うまく相手に合わせることはたしかに難しい。しかし、相手がどのように世界を見て感じているのかを少しでも理解することで、どこまで相手を受容できるか、どこまで譲歩できるか、そしてその限界がどこにあるのかを見定めることができるだろう。それこそが、より現実主義的な異文化交流を可能とさせる鍵であり、比較思想史という学問はその鍵を提供するものといえるのである。